

「一番好きなシーンは、  
奈緒ちゃんが大好きなビーズをそろえた後に  
また箱にひっくり返すところです。  
もったいないとか、意味がないとか  
思ってしまう自分がいて…  
人生とは、生きるとは、プロセスそのものだ  
という、奈緒ちゃんのメッセージに  
教えられました」

——（映画『大好き』に寄せられた感想から）

本当に『大好き』は、いつもに増して感想が素晴らしい。アンケートに書かれた感想だけでなく、手紙やメールにもとても心動かされるものがあります。私の映画をよく観てくれている30代の旧知の女性から送られてきた手紙にも感動したので紹介します。

重い病気をしたので、今、子どもを産むと障がいのある子ができる可能性がある、と医師に言われ悩んでいたという彼女が、たまたま『大好き』を観て心が決まった、という内容でした。

「障がいを持ちながら、元気に50歳を迎えた奈緒ちゃんもさることながら、その奈緒ちゃんを50年にわたり育てる中で受け止めてきた思いを、言葉にして語りかけるお母さんの生き生きした姿が、美しいと思った。さらに後半にちょっと紹介される、奈緒ちゃんのお母さん同様、障がいのある子どもを50年以上にわたって育ててきた『ぴぐれっと』のお母さんたちの笑顔に強く勇気づけられた。私も80歳になったら、あんな風に語り、笑えるようになろう…なれる気がする。どんな子どもが生まれても、しっかり向き合って一緒に生きて行くんだ、と決心がついた。50年後の自分の姿を映画『大好き』に垣間見ることができた、映画を創ってくれて、ありがとう」という内容だった。

「いのち」と向き合うただ中で、思い悩む人に『大好き』という映画の空気感が、微かかも知れないけど、励ましのエールを送れたことをとても嬉しく思った。

「映画は観る人のものだ…」と、しばしば口にしながら私は、『大好き』という映画のことを、自分自身が奈緒ちゃんとその家族を見守り続けてきたこれまでの50年のこと、その「記録」ということに縛られていたな、と思い知らされる。

頂いた手紙は『大好き』という映画は、実はこの先50年のこれからの《記憶》を観せてくれる物語であることを、私に教えてくれた。

『大好き』は100年の記憶を語りかける映画であることを…。

観る人それぞれの立ち位置で、10年、20年、30年…と生きて行くその先を観せてくれる映画なんだ。

「記録」というよりも《記憶》という言葉にこだわったのは、そおいう思い、過去というよりもこれから…を一人ひとりが、自分ごととして受け止めてほしい、ということなのだ。

「映画は観る人と出逢いはじめて映画になる」

奈緒ちゃんシリーズ第1作『奈緒ちゃん』は1995年に発表された30年程前の映画…。けれども、今も上映が続いている『奈緒ちゃん』を2024年の今観る方々にとって、それは今の映画に違いない。

ようやく上映が始まったばかりの『大好き』は50年のというよりも、100年の記憶…。これから上映を重ねるごとに、110年、150年、200年、1000年の記憶になるのだ。

最後にまた最近の感想をひとつ。

「奈緒ちゃんシリーズ、全部観ました。  
人生について、いのちについて、  
天命、宿命、運命について  
たくさんのことを考えさせられました。  
ありがとうございました。」

もっと続きも観たいです…」